

## 12. 国際言語文化研究科

I	国際言語文化研究科の	
	研究目的と特徴	・ ・ ・ ・ ・ 12- 2
II	「研究の水準」の分析・判定	・ ・ ・ ・ ・ 12- 4
	分析項目 I 研究活動の状況	・ ・ ・ ・ ・ 12- 4
	分析項目 II 研究成果の状況	・ ・ ・ ・ ・ 12- 11
III	「質の向上度」の分析	・ ・ ・ ・ ・ 12- 13

## I 国際言語文化研究科の研究目的と特徴

### 1. 研究の目的と基本方針

国際言語文化研究科における研究の目的は「国際言語文化学分野における深い学識と卓越した能力の追求を通して文化の進展に寄与する」である。

この目的を追求するために、基本方針「理論と実践の両立・統合をめざし、既存の人文系学問領域の境界を超えて、学際的かつ領域横断的な新しい研究を開拓・推進する」ならびに、次の4つの目標を定め、研究活動を実施している。

- ① 基幹的総合大学にふさわしい学術的成果を生み出す研究拠点を形成する。
- ② 本研究科で育成した研究者を核とする国際的な学術連繋の拠点を形成する。
- ③ 人文系の社会連繋拠点の形成をめざし、新分野の研究成果を生み出す。
- ④ 本研究科の研究成果を広く社会に還元する。

これは、名古屋大学学術憲章にある「創造的な研究活動による心理の探求、先端的・多面的な学術研究を通じた知的成果、研究成果の社会や地域への還元」を国際言語文化学分野で実現しようとするものである。

### 2. 目標と方針

国際言語文化研究科は「基幹的総合大学にふさわしい中核的拠点形成、質の高い学術成果と社会還元」を第2期の重点目標にしている。

全学の中期目標・中期計画にそって、次の方針を立て、目標の達成に努めている。

(1) 中期目標・中期計画 (K10: 「世界トップレベル研究拠点プログラム」や「国際科学イノベーション拠点整備授業」等の推進により中核的な研究拠点を形成する) に対応した方針や取組

言語が媒介する文化・社会現象の領域横断的研究拠点を形成する。(国際言語文化研究科の中期計画 K11)。

(2) 中期目標・中期計画 (K18: グローバルな視点で学術活動・国際協力を進める。特に「名古屋大学アジアキャンパス」等を活用し、法整備や医療行政等に携わる各国の国家中枢人材等を対象とした博士課程教育プログラムの平成26年度導入に向けた体制整備や制度設計・構築を行う。) に対応した方針や取組

国際シンポジウム等を通じて研究成果を社会に発信する。国外の教育研究機関との学術交流を推進し、交換留学プログラムを充実させる。(国際言語文化研究科の中期計画 K13、K18)

(3) 中期目標・中期計画 (K14: 様々な組織と協力し、教育・文化・福祉・安全の向上に貢献する) に対応した方針や取組

他大学、地方自治体、民間の研究所・企業等と協力し、連携講座・公開シンポジウム等を共催する。(国際言語文化研究科の中期計画 K15)

(4) 中期目標・中期計画 (K11: 若手研究者を育成するための環境を整備する) に対応した方針や取組

研究科の研究員制度を拡充する。(国際言語文化研究科の中期計画 K10)

(5) 中期目標・中期計画 (K32: 学内組織を継続的に見直す) に対応した方針や取組

研究科内の組織を継続的に見直す。(国際言語文化研究科の中期計画 K23)

(6) 中期目標・中期計画 (K48: 自己点検・評価等に関する情報発信を進める) に対応した方針や取組

定期的に研究科の自己点検・外部評価等の情報を発信する。(国際言語文化研究科の中期計画 K31)

(7) 中期目標・中期計画 (K36: 研究推進や産学官連携の担当部署による研究支援を強化し、外部研究資金を獲得する、K37: 寄付金収入を確保するための多様な取組を行う) に対応した方針や取組

科学研究費補助金の採択率を高めるとともに、その他の外部資金の獲得に努める。寄付金収入を確保するための多様な取組を行う。(国際言語文化研究科の中期計画 K25、K26)

### 3. 研究科の特徴

本研究科は、ミッションの再定義にもあるように、「国際言語文化学の分野における深い学識と卓越した能力の追求を通して文化の進展に寄与する」ことを研究目的とし、研究の基本方針として、「理論と実践の両立をめざし、既成の文化的境界を超えて、学際的かつ領域横断的な新しい研究を開拓・推進する」ことを掲げている。言語と文化の有機的連関やその通時的・共時的広がりをもつ多角的な視座から研究することにより、これまでの学問的枠組みにとらわれない自由な発想に基づき、既存の文化的境界やアカデミズムの境界を越えて、学際的かつ領域横断的な分野を開拓することを目指している。また、理論と実践の両立を学是とする立場から、言語文化研究と教育の相互的フィードバックを促進し、他方、言語文化と実社会やパフォーマンスの現場との連繫システムを構築することにより、先端的かつ総合的な研究分野の創出と成果の還元を図っている。

本組織は、以上の理念に基づき、平成10年に独立研究科として設立され、日本言語文化専攻（基幹講座2、協力講座3）と国際多元文化専攻（基幹講座2、協力講座3）の二専攻でスタートした。その後平成15年に、この理念に即して拡充改組が図られ、従前の6協力講座のうち5講座が基幹講座化されるとともに、日本語教育方法論講座（日言文：協力講座）とジェンダー論講座（国際多元：基幹講座）が増設され、高度専門職業人コース（平成22年度より「英語高度専門職業人コース」と改名）も設置された。さらに学内措置として、企業との連繫によるメディアプロフェッショナル講座が国際多元文化専攻に置かれ、平成17年度には正式に基幹講座化されてコースとして教育活動を開始した。

本組織の研究活動は第II期においてさらに活発化しており、著書や科学研究費補助金を得た研究において、本組織の目標にそった学際的かつ領域横断的な研究成果をあげている。また、平成27年度3月現在で、外国籍の研究者、女性研究者の比率がそれぞれ16%、30%（協力講座・G30含む）と高く、これは本組織の特色である。他方、以上の特色を生かした多岐にわたるテーマで国際シンポジウム、講演会などが活発に行われており、新しいタイプの学術研究拠点形成のための基盤を固めつつある。

#### [想定する関係者とその期待]

国際言語文化研究科の研究活動に対する関係者としてはまず、日本語・日本文化学、国際多元文化学の国際的な学界や研究者を想定している。その期待は、基幹的研究重点大学を支える一組織としての役割を担うと同時に、国際言語文化学に関する研究活動の核となる優れた研究者の集団として、また学際的・領域横断的な新分野を開拓する意欲的な研究者の集団として、高度な学術的成果を多数産み出すことにある。さらなる関係者としては、国際言語文化学への関心、及び学術と実社会とを架橋する人文系の産学社会連繫に関心をもつ学生及び一般社会人を想定しており、その期待は、本組織の学術的研究成果をさまざまな媒体や活動を通じて広く社会に還元することにある。

## II 「研究の水準」の分析・判定

## 分析項目 I 研究活動の状況

## 観点 I-1 研究活動の状況

(観点に係る状況)

観点 I-1-① 研究実施状況 (競争的資金による研究実施状況、共同研究の実施状況、受託研究の実施状況など)

## 【特色ある研究等の推進】

研究の基本方針に基づき、異文化理解の視点を踏まえた日本語・日本文化研究、多元文化研究のほかに、メディア研究、ジェンダー論研究をはじめとする学際的・領域横断的研究、先端的分野の研究、フィールド調査に基づく研究などを行っている。

## 【学際的研究の促進】

第 I 期に続き、学際的・領域横断的な新しい研究の開拓・推進を実践している。メディア、ジェンダー、音楽、美術、舞踊などと言語文化をつなぐ新分野の研究を進めるとともに、国際研究集会、国内研究集会、講演会を通して、異なる分野、組織の研究者との連携を図っている。【資料 I-1-1、別添資料 I-A: 国際シンポジウム「創造するアジア」参照】

## 【社会課題】

平成 27 年度に「グローバルメディア研究センター」を設置し、メディア研究における社会連携を強化した。

## 【国際連携】

第 I 期に続き、東アジア諸国を中心とする海外の大学との学術交流を進めている。また、国際研究集会を多数開催することで(平成 22~27 年度の開催件数 50 件 [講演会を除く])、国際的なネットワーク構築を進めている。【資料 I-1-2 参照】

## 【地域連携】

東海・中部地域の学会・研究会活動等の拠点としての役割を果たし、地域に密着した学会・研究会を継続して主催している。

## 【拠点形成】

国際研究集会、国内外の研究者を招いての講演会開催、海外での招待講演などにより、日本語教育・応用言語学分野での国際的拠点形成の準備を進めている。【資料 I-1-3、I-1-4 参照】

資料 I-1-1 主な研究集会 (平成 27 年度)

開催日	研究集会テーマ
2015. 9. 3	「グローバル人材育成教育プログラムの可能性「テレビ会議システムで世界とつながる」」
2015. 9. 25	国際シンポジウム「食の危機と新しい農業のあり方をめざして」(於ストラスブール大学) (ストラスブール大学と共催)
2015. 11. 21	公開ワークショップ「中国建国前夜のプロパガンダ・メディア表象—劇場文化と身体芸術のコラボレーション」
2015. 12. 19	ミニ・カンファレンス “MEDIA TEXT vs. AUDIENCE of K-POP”
2016. 1. 26	レクチャー&シンポジウム「オペラの昨日・今日・明日—フィンランドの作曲家ユハ・コスキネンを迎えて」(愛知県立芸術大学音楽学部と共催)
2016. 2. 12	国際シンポジウム “Global Society and Japan: 70 Years after World War II and beyond”
2016. 3. 10	国際シンポジウム「擬人化を考える—異類の軍記を中心として」
2016. 3. 20	「日本語文化研究」学術研究会(於東華大学)(東華大学、上海外国語大学と共催)
2016. 3. 20~21	国際シンポジウム “‘Mobility’ and North American Literature/Culture”

《出典：ウェブサイト <http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/events.html>》

名古屋大学国際言語文化研究科 分析項目 I

資料 I-1-2 国際／国内研究集会および講演会開催状況

年度	シンポジウム (国際)	フォーラム・セミナー (国際)	講演会
平成 22 年度	9 (6)	2 (1)	14
平成 23 年度	8 (4)	1 (1)	32
平成 24 年度	15 (8)	0 (0)	5
平成 25 年度	25 (4)	7 (5)	2
平成 26 年度	7 (7)	5 (5)	16
平成 27 年度	6 (6)	4 (3)	19

《出典：認証評価提出用資料》

(参考) 資料 I-1-2 国際／国内研究集会および講演会開催状況 (第 I 期)

年度	シンポジウム (国際)	セミナー (国際)	研究会	講演会
平成 16 年度	2 (2)		2	5
平成 17 年度	2 (0)		1	2
平成 18 年度			1	6
平成 19 年度	3 (1)	1 (1)	1	10
平成 20 年度	6 (4)	1 (0)	0	2
平成 21 年度	9 (7)	5 (1)	0	10

資料 I-1-3 日本語教育学講座公開講演会開催記録 (平成 27 年度)

開催日	講師	タイトル
2015.10.23	Danijela Trenkic (ヨーク大学)	“Why are articles hard?: Exploring second language representations and processing”
2015.10.23	若林茂則 (中央大学)	「3 人称単数現在の -s の難しさの多層性に基づく文法知識と使用のモデル」
2015.10.23	Michael Patrick Mansbridge (名古屋大学・博士後期課程)	“A typological comparison in the processing of relative clauses between prenominal languages”
2015.11.13	森山新 (お茶の水女子大学)	「日本語多義動詞の意味分析の方法論の確立をめざして」
2015.11.13	松村瑞子 (九州大学)	「日本人の言語行動におけるポライトネス--効率的な日本語ポライトネス指導を目指して」
2016.1.29	鍋島弘治朗 (関西大学)	「身体性とメタファー--身体性とメンタルスペースを使ったメタファー理論の素描」

資料 I-1-4 応用言語学講座公開講演会開催記録 (平成 27 年度)

開催日	講師	タイトル
2015.4.24	Denis Paillard(パリ第 7 大学)	“A propos des constructions à verbes en série en khmer”
2015.7.8	Alan Hyun-Oak Kim (南イリノイ大学)	「敬語の背後で働く原理を「メタファーの体系」に求める試み：新しい敬語理論の展開」
2015.10.9	Jean-Jacques Franckel (パリ第 10 大学)	“Identité et variation des unités lexicales”
2015.11.18	金水敏 (大阪大学)	「直示とは何か：日本語を例に、その体系と歴史につ

名古屋大学国際言語文化研究科 分析項目 I

		いて」
2015.12.7	Nick Enfield (シドニー大学)	“The Utility of Meaning: Language is Anthropocentric, Cultural, and Useful”
2015.12.11	益岡隆志 (神戸市外国語大学)	「日本語の主題と主語」
2015.12.15	虎谷紀世子 (ヨーク大学)	「役割指示文法からみたオノマトペの統語位置--通言語的視点から」
2016.2.2	砂川有里子 (筑波大学)	「日本語学習辞書へのコーパスの活用」
2016.2.8	今井むつみ (慶應義塾大学)	「思考の言語相対性と普遍性」
2016.3.28	第一部:宮地朝子 (名古屋大学)	「日本語シカ・ダケの成立と文法変化:名詞から副詞句・焦点句構成へ」
	第二部:青木博史 (九州大学)	「連体形から見た日本語文法史」

《以上、出典はウェブサイト <http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/events.html>》

観点 I-1-② 研究成果の発表状況 (論文・著書等の研究業績や学会での研究発表の状況、研究成果による知的財産権の出願・取得状況など)

【研究成果の状況】

平成 22 年度以降の 6 年間に公刊された国際言語文化研究科の教員による研究論文数は 254 本 (他に紀要等の論文数 234 本)、著書は 46 冊 (うち単著 9 冊)、学会発表数は 458 件 (うち国際学会 251 件)、海外での学会発表は 174 件 (うち招待講演 52 件)、受賞は 4 件である。著書数は第 I 期の水準をやや下回ったものの、研究論文数、海外での学会発表数は第 I 期の数値を上回っている。なお、本研究科は教授 30 名、准教授 25 名、講師 1 名、助教 2 名、計 58 名 (平成 27 年度) で教員組織を構成している (協力講座教員 7 名、G30 教員 2 名、企業連携教員 2 名を含む)。**【資料 I-1-5 参照】**

【社会的還元】

第 I 期に引き続き、国際研究集会などを積極的に開催して (国際研究集会: 50 件、講演会: 88 件)、研究成果の社会的還元に努めている。**【資料 I-1-2 (p. 12-5) 参照】**

資料 I-1-5 教員の研究業績

年度	論文発表数	著書 (編著・共著)	研究科内紀要論文・教科書等	受賞数	学会発表 (国際/国内)	海外での発表 (招待講演)
平成 22	48	10 (8)	65	1	76 (36 / 40)	20 (3)
平成 23	46	7 (5)	42	2	81 (43 / 38)	38 (2)
平成 24	47	8 (6)	37	1	83 (39 / 44)	7 (3)
平成 25	33	5 (5)	12	0	47 (27 / 20)	25 (22)
平成 26	41	12 (10)	26	0	93 (56 / 37)	44 (12)
平成 27	39	4 (3)	52	0	78 (50 / 28)	40 (10)

\* 「海外での発表」数は「学会発表 (国際)」にも含まれる。また、データは協力講座を含む。

《出典: 認証評価用提出資料》

(参考) 資料 I-1-5 教員の研究業績 (第 I 期)

年度	論文発表数 / 査読付き (共著)	著書 (共著)	国際会議の招待講演	受賞数	論文発表総数 / 査読付き論文を含む (共著)	海外での発表
平成 16	9	7 (7)			90 (11)	6
平成 17	11	12 (7)			77 (7)	11
平成 18	7	12 (8)		1	84 (8)	18
平成 19	10 (3)	13 (9)	2	2	71 (6)	13
平成 20	43 (0)	6 (5)	0	1	82 (0)	11
平成 21	43 (9)	6 (6)	1	1	85 (9)	17

観点 I-1-③ 研究資金獲得状況（競争的資金受入状況、共同研究受入状況、受託研究受入状況、寄附金受入状況、寄附講座受入状況など）

【研究資金の状況】

平成 22～27 年度の 6 年間で、国際言語文化研究科教員・学術研究員が代表者として申請し採択された科学研究費補助金は合計 69 件（新規分のみ）であり、継続分を含めると、年平均 34.3 件（受入金額 34,226 千円 [直接経費]）である。第 I 期と比べると、採択件数は 58%、受入金額は 68%の増加となった。また、採択率も一貫して 60%以上を保っている。寄付金受入実績は 16 件であり、ほかに日本学術振興会の受託事業などがある。【資料 I-1-6、I-1-7、I-1-8、I-1-9、I-1-10 参照】

資料 I-1-6 科学研究費受入状況

		新規採択	継続採択	合計	
平成 22 年度	件数	11	21	32	
	受入金額	直接経費	13,500,000	15,000,000	28,500,000
		間接経費	3,300,000	4,500,000	7,800,000
		合計	16,800,000	19,500,000	36,300,000
平成 23 年度	件数	11	20	31	
	受入金額	直接経費	20,900,000	17,100,000	38,000,000
		間接経費	6,270,000	5,130,000	11,400,000
		合計	27,170,000	22,230,000	49,400,000
平成 24 年度	件数	15	24	39	
	受入金額	直接経費	17,800,000	23,600,000	41,400,000
		間接経費	4,410,000	7,080,000	11,490,000
		合計	22,210,000	30,680,000	52,890,000
平成 25 年度	件数	6	29	35	
	受入金額	直接経費	7,600,000	29,600,000	37,200,000
		間接経費	2,280,000	8,880,000	11,160,000
		合計	9,880,000	38,480,000	48,360,000
平成 26 年度	件数	9	25	34	
	受入金額	直接経費	6,700,000	21,922,246	28,622,246
		間接経費	1,530,000	6,270,000	7,800,000
		合計	8,230,000	28,192,246	36,422,246
平成 27 年度	件数	17	18	35	
	受入金額	直接経費	19,400,000	12,236,631	31,636,631
		間接経費	4,800,000	3,435,000	8,235,000
		合計	24,200,000	15,671,631	39,871,631

（参考）資料 I-1-6 科学研究費受入状況（第 I 期）

		新規採択	継続採択	合計	
平成 16 年度	件数	7	7	14	
	受入金額	直接経費	9,100,000	5,500,000	14,600,000
		間接経費	0	0	0
		合計	9,100,000	5,500,000	14,600,000
平成 17 年度	件数	9	8	17	
	受入金額	直接経費	9,900,000	6,900,000	16,800,000
		間接経費	0	0	0
		合計	9,900,000	6,900,000	16,800,000
平成 18 年度	件数	7	13	20	
	受入金額	直接経費	10,000,000	9,500,000	19,500,000
		間接経費	600,000	0	600,000
		合計	10,600,000	9,500,000	20,100,000
平成 19 年度	件数	13	11	24	
	受入金額	直接経費	11,000,000	11,830,000	22,830,000

名古屋大学国際言語文化研究科 分析項目 I

		間接経費	2,910,000	2,250,000	5,160,000
		合計	13,910,000	14,080,000	27,990,000
平成 20 年度	件数		11	13	24
	受入金額	直接経費	12,050,000	10,590,000	22,640,000
		間接経費	3,255,000	2,937,000	6,192,000
		合計	15,305,000	13,527,000	28,832,000
平成 21 年度	件数		13	18	31
	受入金額	直接経費	12,100,000	14,540,000	26,640,000
		間接経費	2,610,000	4,002,000	6,612,000
		合計	14,710,000	18,542,000	33,252,000

資料 I-1-7 科学研究費採択率（教員分採択件数÷4月1日教員数：名誉教授、協力講座教員、G30教員、企業連携教員を除く）

	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
採択率	66.0%	64.6%	78.7%	67.4%	61.7%	61.7%

資料 I-1-8 受託研究・受託事業実績

	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
受託件数	1	1	1	1	1	1
受入金額	6,500,000	6,600,000	6,710,000	54,120	1,950,000	1,885,000

資料 I-1-9 寄附金実績

	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
受託件数	2	1	5	3	3	2
受入金額	425,000	149,360	2,173,369	972,062	469,505	1,500,000

資料 I-1-10 名古屋大学教育奨励費採択分

	プロジェクト名	代表者	配分額
平成 22 年度	グローバル時代のジャーナリズム教育	中村登志哉	250,000
平成 25 年度	グローバルメディア・プロジェクト「世界と対話する：世界が日本を見る眼、日本が世界を見る眼」	中村登志哉	400,000

《以上、出典は文系経理課記録》

観点 I-1-④ 研究推進方策とその効果

【基盤的資金等の配分】

第 I 期に引き続き、「研究科プロジェクト経費」を設け、学際的・領域横断的研究の支援、新分野研究の基盤づくり、国内外研究集会の開催など、広く研究の推進を図っている。その効果は国際研究集会開催数の増加などに見ることができる。第 II 期の開催件数は 50 件であり、第 I 期（16 件）の 3.1 倍となった。【資料 I-1-5（p.12-6）、I-1-11 参照】

【人事方策等】

公募書類に日本語非母語話者が応募できること、男女共同参画を推進していることを記し、教員採用人事において、優秀な外国籍教員、女性教員を積極的に採用するよう努めている。その結果、当該期に新たに採用した教員 14 名のうち、女性 5 名（35.7%）、外国籍の者 4 名（28.6%）となった。社会連携講座の教授 1 名を除く 13 名が公募による採用である。

【別添資料 I-B：アメリカ言語文化講座公募文書、資料 I-1-12 参照】

【ポストク】

第 I 期に引き続き、「学術研究員」制度、「博士候補研究員」制度を維持している。学術研究員には科研費応募を義務づけ、研究科運営委員会が科研費応募のための助言を行っている。その結果、平成 22 年～27 年の 6 年間に学術研究員による応募 13 件が採択された（継続分を含む）。【資料 I-1-13 参照】

【会議開催】

第 I 期の後半に引き続き、第 II 期でも研究集会を積極的に開催している。平成 22～27

## 名古屋大学国際言語文化研究科 分析項目 I

年度の6年間における、国際シンポジウムおよび国際フォーラム・セミナーの開催件数は50件であり、第I期の3.1倍に増加した。また、講演会開催件数は88件であり、第I期(34件)の2.6倍となった。【資料I-1-2 (p. 12-5) 参照】

### 【情報発信】

研究科が発行する『言語文化論集』『言葉と文化』『多元文化』『メディアと社会』を研究科ホームページまたは名古屋大学リポジトリにて公開している。【資料I-1-14 参照】

### 資料I-1-11 研究科プロジェクト経費配分記録

	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
採択件数	8	9	6	11	11	11
配分額	5,228,480	4,900,000	2,921,000	4,500,000	4,230,000	3,400,000

《出典：文系経理課記録》

### 資料I-1-12 新規採用人事一覧

着任時期	採用人数	採用者性別等
2010.4	教授2 准教授2	男3、女1
2011.4	准教授2	男2(外国籍2)
2012.4	准教授1	女1
2013.4	准教授1	男1
2014.4	准教授1 助教1	男1、女1(外国籍1)
2015.2	准教授1	男1
2015.4	准教授2	男1、女1
2015.11	助教1	女1(外国籍1)
計	教授2 准教授10 助教2	男9 女5 (うち外国籍4)

### 資料I-1-13 学術研究員受入数

	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
受入数	7	9	8	11	11	12
うち科研費採択者数	0	1	3	3	4	2

《以上、出典は文系総務課記録》

### 資料I-1-14 研究科発行の論集 URL 一覧

雑誌名	URL
『言語文化論集』	<a href="http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/proj/genbunronshu/">http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/proj/genbunronshu/</a>
『言葉と文化』	<a href="http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/nichigen/menu4.html">http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/nichigen/menu4.html</a>
『多元文化』	<a href="http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/tagen/tagenbunka/">http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/tagen/tagenbunka/</a>
『メディアと社会』	<a href="http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/media/aboutus/">http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/media/aboutus/</a>

(水準) 期待される水準にある  
(判断理由)

本研究科は基幹的研究重点大学を支える一組織であると同時に、国際的・多元的視座に立つ言語・文化の研究活動を展開する研究者集団として、多彩な研究成果を産み出している。第II期には、著書数において第I期の水準をやや下回ったものの、論文発表数、海外での学会発表数は増加した。研究活動は依然活発であり、また国際化が進んでいる。これらの業績には理論と実践との両立、学際的・領域横断的な新分野の研究も多く含まれる。

## 名古屋大学国際言語文化研究科 分析項目 I

また、本研究科が主催する国際研究集会や講演会の件数も増え、メディア、ジェンダー、音楽、美術、舞踊と言語文化をつなぐ新しいテーマ設定によって、特色を打ち出している。研究集会・講演会はすべて公開で行われ、本研究科の研究成果と知的資産を広く社会に還元している。科研費の採択件数と受入金額も第 I 期を上回っており、また、「研究科プロジェクト経費」によって、若手研究者の育成、学際的・領域横断的研究の支援、新分野研究の基盤づくりなど、広く研究の推進を図っている。これらの分析から、総じて観点 I - 1 は期待される水準にある

<b>観点 I - 2 大学共同利用機関、大学の共同利用・共同研究拠点に認定された附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の実施状況</b>
--

該当しない。

## 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

観点Ⅱ－１ 研究成果の状況（大学共同利用機関、大学の共同利用・共同研究拠点に認定された附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の成果の状況を含む。）

（観点に係る状況）

観点Ⅱ－１ 学部・研究科等の組織単位で判断した研究成果の質の状況、学部・研究科等の研究成果の学術面及び社会、経済、文化面での特徴、学部・研究科等の研究成果に対する外部からの評価

## 【研究業績説明書】

本研究科の研究の特徴は既存の言語文化系学問領域の境界を越える、自由な発想に基づく研究であり、言語・文化に対する多元的かつ領域横断的なアプローチが多岐にわたる研究成果を産み出している。まず、言語に関する研究では、とくに言語の認知、処理、習得に関する研究が優れた成果をあげており、研究科の学術成果Sとして、「日韓語における名詞化構文の認知類型論的研究」、「日本語のかき混ぜ語順文の読み過程の視線計測研究」、「日本語のピッチアクセントによる概念アクセスの神経基盤を検討する脳波計測研究」、「日本人英語学習者による名詞の可算・不可算の第二言語習得に関する研究」を選定した。また、文学・文化に関する研究では、近現代英文学の研究が活発であり、研究科の学術成果Sとして、「ハーディの本文異同の研究」を選定した。

## 【外部からの賞・評価、分析】

日韓語を対象とする認知類型論研究の成果、日本語を対象とする心理言語学研究の成果、日本人英語学習者を対象とする第二言語習得研究の成果は、それぞれの分野でインパクトファクターの高い学術誌に掲載された（*Journal of Pragmatics* 1.05、*Journal of Neurolinguistics* 1.49、*Bilingualism* 2.009）。ハーディ研究の成果はその分野を代表する学術誌（*Hardy Review*）に掲載され、著者は関連トピックに関する講演に招待された。ヘミングウェイを対象とするセクシュアリティ研究の成果は、ヘミングウェイ研究における代表的学術誌（*The Hemingway Review*）および論文集に掲載された。後者は *Choice*、*Modern Language Review*、*Journal for American Studies*、*Contemporary Review* などに書評が掲載され、“a stimulating collection” “rich in detail and contemporary in approaches” などの高い評価を受けた。ギッシングに関する和文と英文の論文集はともに科研費出版助成を受けて公開されたもので、前者は、『ヴィクトリア朝文化研究』、*The Gaskell Journal* ほかで書評された。韓国社会を対象としたメディア研究の成果は第Ⅰ期に出版助成の対象として選ばれたものである（韓国財団出版助成及び名古屋大学総長裁量経費出版助成）。アブハズ語研究の成果は科研費（研究成果公開促進費）を受けて公開されたものである。

## 資料Ⅱ－１－１ 特筆すべき研究成果一覧

研究テーマ	代表的研究成果
1. 日韓語における名詞化構文の認知類型論的研究	(1) Horie, Kaoru. “Versatility of Nominalizations: Where Japanese and Korean Contrast: Diachronic and Typological Perspectives.” Yap, F. et al. (eds.), <i>Nominalizations in Asian Languages. Diachronic and Typological Perspectives</i> . John Benjamins, 2011. 473- 497. (2) Horie, Kaoru. “The Interactional Origin of Nominal Predicate Structure in Japanese: A Comparative and Historical Pragmatic Perspective.” <i>Journal of Pragmatics</i> 44: 663-679. Doi:10.1016/j.pragma.2010.09.20.
2. 日本語のかき混ぜ語順文の読み過程の視線計測研究	(1) Tamaoka, K., Asano, M., Miyaoka, Y., & Yokosawa, K. “Pre-and post-head processing for single-and double-scrambled sentences of a head-final language as measured by the eye tracking method.” <i>Journal of Psycholinguistic Research</i> 43 (2014): 167-185. 007/s10936-013-9244-8.
3. 日本語のピッチアクセントによる概念	(1) Tamaoka, K., Saito, N., Kiyama, S., Timmer, K., & Verdonschot, R.G. “Is pitch accent necessary for comprehension by native Japanese speakers? An ERP

名古屋大学国際言語文化研究科 分析項目Ⅱ

アクセスの神経基盤を検討する脳波計測研究	investigation.” <i>Journal of Neurolinguistics</i> 27 (2014): 31-40. DOI: 10.1016/j.jneuroling.2013.08.001.
4. 日本人英語学習者による名詞の可算・不可算の第二言語習得に関する研究	(1) <u>Inagaki, S.</u> “Syntax-semantic mappings as a source of difficulty in Japanese speakers’ acquisition of the mass-count distinction in English.” <i>Bilingualism: Language and Cognition</i> 17 (2014): 464-477. DOI: 10.1017/S1366728913000540.
5. ハーディの本文異同の研究	(1) <u>Uehara, Sanae.</u> “Deception and Desire: Hardy’s Revisions to <i>The Mayor of Casterbridge</i> .” <i>Hardy Review</i> 13 (2011): 158 - 67. (2) <u>Uehara, Sanae.</u> “The Profitable Reading of Fiction: Hardy’s Extended Creative Process: The Case of Susan and Tess.” Invited lecture at “Hardy at Yale II.” 2011.6. (3) <u>Uehara, Sanae.</u> “Hardy in Japan: Translators, Translation, and Publication.” <i>Literature Compass</i> 13 (2016): 174-185. DOI: 10.1111/LIC3.12302.
6. クリア理論を用いたアメリカ文学の研究	(1) <u>Tanimoto, Chikako.</u> “An Elephant in the Garden: Hemingway’s Africa in <i>The Garden of Eden</i> Manuscript.” <i>Hemingway and Africa</i> . Ed. Miriam B. Mandel. Camden House, 2011. 199-211. (2) <u>Tanimoto, Chikako.</u> “Queering Sexual Practices in ‘Mr. and Mrs. Elliot.’” <i>The Hemingway Review</i> 32.1 (2012): 88-99.
7. エリザベス・キャスケル—ヴィクトリア朝前半の社会と文化の批判的研究	(1) <u>松岡光治</u> (編著)『ギヤスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化——生誕二百年記念』溪水社、2010. xxxvi+1-684. (2) <u>Matsuoka, Mitsuharu</u> , ed. <i>Evil and Its Variations in the Works of Elizabeth Gaskell: Sesquicentennial Essays</i> . Osaka Kyoiku Toshō, 2015. xxv+1-539.
8. フランス国立図書館写本室やフランス国内に所蔵される江戸時代における日本物語絵写本研究	(1) <u>伊藤信博</u> 、クレール＝碧子・ブリッセ、増尾伸一郎 (編)『『酒飯論絵巻』影印と研究：文化庁本・フランス国立図書館本とその周辺』臨川書店、2015. 1-420. (2) <u>伊藤信博</u> 、阿部泰郎 (編)『酒飯論絵巻の世界』(『アジア遊学』 172、特集号) 勉誠出版社、2014. 1-183. (3) <u>Ito, Nobuhiro.</u> “Productions agricoles et mesures contre les famines aux époques de Muromachi et d’Edo.” <i>Désastres et alimentation: Le défi japonais (Géographie et Cultures</i> 86). Ed. Nicokas Baumert and Sylvie Guichard-Angus: 31-47.
9. 韓国の情報化と縁故主義ネットワークの変容についての研究	(1) <u>金相美</u> 『韓国の情報化と縁故主義ネットワークの変容』ミネルヴァ出版、2012. 1-242
10. アブハズ語の記述	(1) <u>Yanagisawa, Tamio.</u> <i>A Grammar of Abkhaz</i> . Hituzi Syobo, 2013. xiv + 1-547

(水準) 期待される水準にある  
(判断理由)

本研究科が掲げる研究目標に対応して、近年高度の研究成果が増えており、代表する研究業績が示すように、その状況は国際言語文化学の学界や研究者の期待に答えていると判断される。また、国際的な学術連繋の拠点形成も、国際シンポジウム・セミナー・講演の開催、海外での招待講演への対応などによって基盤を固めつつある。人文系の産学社会連繋をめざすメディアにかかわる新分野の研究も、その成果を広く社会に発信する催しが行われている。さらに、本研究科の研究成果は、代表的な研究業績に示されるものだけでなく、様々のかたちで広く社会に還元されており、学生や知的関心をもつ一般社会人にとって期待される水準にあると判断される。

### Ⅲ 「質の向上度」の分析

#### (1) 分析項目Ⅰ 研究活動の状況

##### 【重要な質の向上／質の変化があった事項】

例1：第Ⅰ期には、国際的な研究集会の開催回数が必ずしも多いとは言えなかった（国際シンポジウム・セミナーの開催数16件）。第Ⅱ期には研究科内の「教育研究推進プロジェクト経費」を活用するなどして、国際研究集会を積極的に開催することに努めた。その結果、平成22年度以後の6年間における、国際シンポジウムおよび国際フォーラム・セミナーの開催数は50件となった。第Ⅰ期の3.1倍に増加したことになる。

例2：第Ⅰ期では当初、科学研究費補助金採択状況が低調であったため、状況改善の努力を重ねてきた。その結果、受入件数、受入金額は年々徐々に向上したが、当該期の年平均の採択件数は21.7件、受入金額は20,400千円（直接経費）であった。採択率も第Ⅰ期最終年度を除けば、60%を下回った。第Ⅱ期には、「科学研究費補助金公募説明会」の開催などによる支援を行ってさらに努力を続けた。その結果、平成22～27年度の採択件数は年平均34.3件となり、受入金額も34,226千円（直接経費）となった。第Ⅰ期と比べると、採択件数は58%、受入金額は68%の増加となった。また、採択率も一貫して60%以上を保っている。

例3：第Ⅰ期においては、受託研究・受託事業実績を除くと、寄付金実績は低調であった。第Ⅱ期には、各種基金への応募を活発化させたこともあり、寄付金実績は16件となり、大幅に増加した。

例4：第Ⅰ期の平成18年度に「教育研究推進プロジェクト経費」（平成20年度に「研究科プロジェクト経費」に改称）を設け、若手研究者の育成、学際的・領域横断的研究の支援、新分野研究の基盤づくり、国内外研究集会の開催など、本研究科の研究目標に沿った活動の活性化を図ってきた。第Ⅱ期においても「研究科プロジェクト経費」を維持し、本研究科の研究活動の活性化を図ってきた。

#### (2) 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

##### 【重要な質の向上／質の変化があった事項】

例1：第Ⅰ期には海外での発表件数が必ずしも多いとは言えず、合計76件、年平均12.7件であった。第Ⅱ期に状況の改善を試みた結果、件数が増加し、6年間で174件（年平均29件）となった。また、国際会議での招待講演数も、第Ⅰ期年平均1件（平成19～21年）から8.7件（平成22～27年度）に増えた。第Ⅰ期と比べて、海外での発表件数は2.3倍に、国際学会での招待講演は8.7倍となった。